子どもたちに惹かれた良寛

西をさむ

人がこの世に生を授かる時に「おぎゃあ」と泣き叫ぶのは感情表現でしょうか。否、これは呼吸器官を始動させる為の点火装置です。

ところが、直ぐに自意識の伝達手段へとスイッチが切り替わるのです。お腹が空けば泣き、眠くなれば泣き、自己の意思が通じるまで泣きます。完全に生命維持装置その物です。この装置は、短時間の内に私達が手に入れて一生涯持ち続けられる絶妙な感情伝達方法です。悲しければ泣き、嬉しい時にも涙を流し、悔しさの余り涙を呑む。時には同情をも誘います。でも時と場所を読み誤ると大変な事に成ります。

ある記者会見の席で、大声で泣き喚いた議員さんが居ました。あれはいけません。意味不明、人格不詳です。しかし、彼は彼なりに好い事もしたのです。皆に羞恥心と笑いを提供して呉れたのですから。

さて、生後三、四ヶ月も経つと赤ん坊は別の意思伝達方法を学びます。両親や周りの人をぼんやりと眺めている時に、自分を見詰めている人のある表情に気付くのです。顔の輪郭が自分を眺めている時に総崩れする、つまり笑うということです。これにはどんな意味が有るのだろうかと、遺伝子の九十％以上が同じである猿を祖先に持つ赤ん坊は、猿真似よろしく同じ様な顔付きをします。すると相手の方もまた同じ顔付きをします。この時、赤ん坊は何とも言われぬ快感を味わうのです。そうして、赤ん坊は二つ目の感情表現を手に入れる事に成功するのです。でも、この純粋な快感はそう永くは続きません。精々、十二、三歳頃まででしょう。

名主の長男として生まれた良寛（幼名：栄蔵）も小さい頃から笑顔いっぱいの中で育てられたと思います。そんな時分から学問に励み名主見習い役にまで成ったのに、はっきりした原因は判りませんが出家して備中は円通寺で修行に入ります。そうして十年ちょっとでの修業成就の後、諸国行脚の乞食三昧の旅に立つのでした。そして、その数年間の道中で色々な笑いを体験した事でしょう。例えば高笑い、薄ら笑い、馬鹿笑い、含み笑い、そしり笑い、照れ笑い。どうも「笑い」が付く言葉には余り好いものは在りませんね。多分、良寛は一度も純真無垢な笑いに出会わなかったのではないでしょうか。この事が越後の出雲崎に帰ろうと決心させたのでしょう。そうして五合庵を仮住いとしたのです。

いざさらば我も返らん秋の暮　　良寛

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

色々な解釈がある様ですが、子どもたちと遊んでいて、その子らは夕暮れになると三々五々家路に着きます。ああ、あの子らの笑顔のなんと美しかった事かと庵へと歩を進めるのです。こんな逸話も残っています。隠れん坊で鬼役になった良寛を残して子どもたちは皆帰ってしまいました。でも良寛は翌朝まで隠れた場所に居たそうです。子どもの行動と笑顔に悟りを見出していたのかもしれません。

屋根引の金玉しぼむ秋の風　　良寛

（つづく）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。